

プラトンと真実在（イデア）

—プラトン『パイドン』を中心に—

大石 誠

はじめに

魂の不死証明を、主な主題としている『パイドン』¹⁾で、第二論証として持ち出されているのが「想起」(ἀνάμνησις)である²⁾。この小論では、『パイドン』での想起の論証をゆるがしかななかったシミアスの反論が、なぜソクラテス(プラトン)にとっては大したものとならなかったのかという問題を、プラトンが真実在を原因として措定した理由を考察することから明らかにする。

『パイドン』の第二論証では、想起によって、魂が人間の姿をとって生まれてくる前に、それ自身で存在していたことが結論されている。想起を使った論証の手順として、まず、日常的な想起を例として挙げて、そこから想起の対象は知覚(感覚)する前に既に知っていなければならないという論理が展開される³⁾。それが魂の不死証明に利用されるのである。今現在、この世に存在する我々は、真実在についてそれが何であるか説明することができないでいる。しかし、感覚物をきっかけとして、真実在(イデア)の存在を思い出ししていく。そして真実在と感覚物が同じものではないという主張も手伝って、魂は人間として生まれてくるより前に、真実在について認識しているという知(以下この、魂が人間の肉体に宿る前に獲得していた真実在の知識のことを Prenatal knowledge の頭文字を取って pk と表記する。)の獲得が語られている⁴⁾。ところが、対話相手のシミアスは、pk をまさに魂が人間として生まれるその瞬間に得た可能性があることを指摘している⁵⁾。しかし、彼の反論は、知識を持ったまま生まれてこないことが確認されたのだから、それを失うのはいつなのか、まさか生まれるその時に得たと同時に失うのかというソクラテスの再反論(76d1-4)により、完全に潰されてしまう。ソクラテスが再反論で根拠としてい

る pk の忘却という点に関して、Gallop は、我々の知識の欠如から、我々が生まれた時に知識を喪失したことがなぜ推論されなければならないのかと疑問を投げかけている。さらに、彼は、生まれつき盲目の子供のアナロジーを挙げている。その内容は、その子供は視覚が欠けているのだから、生まれてくる前は視覚を持っていたが、生まれる時に失ったのだとは誰も考えないだろう。視力を欠いて生まれた人は、けっして視力を持っていなかったのであるから、それを「失った」とは言えないであろうし、彼が後に視力を得ても、彼が持っていなかった視力を「回復する」などとは言えないだろう、というものである⁶⁾。それは、つまり知識を「忘却」した状態で、我々が生まれてきたという命題に対して、どうしてそう言えるのかということである。実際、ペリパトス派のストラトンも同様の反論をしている⁷⁾。プラトン自身の語り口からは、もうそのことは明らかになっているという観がある。おそらく、それは、すべての人が真実在についての説明を与えること(δοῦναι λόγον) ができない故に、厳密に知っている状態にないというプラトンの主張が根拠になっている⁸⁾。しかし、魂が、学習によって想起するということが、自らのものであった知識を回復していくことだとすると、もともと知識は、なんらかの形で人間に属していたのであり、学習によってそれが完全な形となるという、いわば可能態から現実態への移行という形で説明するアリストテレスの言及を提出することができると思われる。彼の説明は、『分析論後書』でおこなわれている。それは次のようなものである。

ἀλλ' οὐδέν (οἶμαι) κωλύει, ὃ μαθάνει, ἔστιν ὡς ἐπίστασθαι, ἔστι δ' ὡς ἀγνοεῖν·
ἄτοπον γὰρ οὐκ εἰ οἶδέ πως ὃ μαθάνει, ἀλλ' εἰ ᾧδί, οἶον ἢ μαθάνει καὶ ὡς. (71b6-8)

「・・・しかし、私が思うに、ある意味では、人がいま学んでいることを知っているけれども、別のある意味では、知らないということを防げるものは何一つとしてない。なぜなら、もし、人が、いま学んでいることを、何かしらの点で知っているなら、奇妙なことではないが、もし、ある特定の点で、つまり学んで知ったその通りの仕方、この意味において人が知っているなら、奇妙なことである。」

εἰ μὲν δὴ ἔχομεν αὐτάς, ἄτοπον· συμβαίνει γὰρ ἀκριβεστέρας ἔχοντας γνώσεις ἀποδείξεως λαθάνειν. εἰ δὲ λαμβάνομεν μὴ ἔχοντες πρότερον, πῶς ἂν γνωρίζομεν

καὶ μαθηάνοιμεν ἐκ μὴ προϋπαρχούσης γνώσεως; ἀδύνατον γάρ, ὡςπερ καὶ ἐπὶ τῆς ἀποδείξεως ἐλέγομεν. φανερόν τοίνυν ὅτι οὐτ' ἔχειν οἶόν τε, οὐτ' ἀγνοοῦσι καὶ μηδεμίαν ἔχουσιν ἔξιν ἐγγίγνεσθαι. ἀνάγκη ἄρα ἔχειν μὲν τινα δύναμιν, μὴ τοιαύτην δ' ἔχειν ἢ ἔσται τούτων τιμιωτέρα κατ' ἀκρίβειαν.

(99b26-34)

「もし、我々が、論証原理の認識をする能力（可能態としてではなく、もう獲得されている、直ぐ使用できる能力、すなわち論証原理をもう知っている状態にあること）を持っているなら、おかしいことである。なぜなら、論証より正確な認識を持っていることに、気がつかないということが帰結されるからである。しかし、もし、我々が前に持っていないのに、それらの能力を得るのなら、我々は、先在している認識からでなくて、どうやってそれらの能力を知ったり、学んだりすることができるのであろうか。なぜなら、我々が論証について話したように、それは不可能であるから。そうだから、それらの能力をいつも持つことも、知らないし、持っていない能力が生じることもできないことは、明らかである。故に、一方で、何かしらの能力（ここでは、可能態としての能力）を持つことが必然であるが、他方、その何かしらの能力は、正確さに即しては、これらのもの（前述されている論証や知識の能力）よりも、優れているものであってはならない。」

また、すぐ後の 100a3-8 では、技術と知識の原理の生じる過程を、「感覚から記憶が生じ、同じ記憶が反復されることにより、経験が生じる。一つの経験は多くの記憶から成り立っており、その経験から技術と知識の原理が生じる」と説明している。同様の説明は、『パイドン』の 96b にもある⁹⁾。

この説明は、知識の起源を「魂の不死」という、いわば神話的な、我々の生そのものの外に出してしまう考え方を排除できるだけでも、我々にははるかに納得がいくと思われるものである。そして、「記憶」から「経験」への移行を pk 獲得に求めずに、抽象や帰納といった言葉で埋め、我々は、「抽象能力」を持つと考える方がはるかに無難であろう¹⁰⁾。Bostock も、まさに、その抽象という点から説明しようと試みる。彼は、Locke などに通じる抽象概念の説明方式を挙げる¹¹⁾。

1. 何かしらの例となる、諸々の事物を知覚する。

2. それらの類似点を見つけ、抽象化を行う。

3. その抽象概念を、既に知っている別の言葉で表現する。

この抽象過程に対しては、『メノン』での、「何であるか知らなければどのようなものであるか知りえない」という論争的命題による反論が有効であるように思われる。第一に、類似点の抽象化はすぐにできないこと、すなわち、類似の仕方は数多く存在するので、その中からどうやって正しい類似点を発見するかということである。第二に、例えば「等しいもの」とか、「大きいもの」というように、それら感覚物が、多くの人にそう知覚されやすいものは抽象化が可能であろうが、「善いこと」、「正義であること」、「敬虔なこと」といった倫理的物事は、人々の間でもその判断が分かれるものである。そのことは、『国家』第一巻での、「正義とは何か」という問答のなかにも、よく現われている。そういう判断が分かれる事物から、果たして類似点を見つけ抽象化できるか、あらかじめ、「何であるか」を知っていなければ抽象化も困難であるという問題がある。結局 Bostock 自身もそのことを認めており、人間には抽象化能力があるという点からの説明はアポリアに陥る。「どのようなものか」から出発し、「何であるか」を知るという抽象や帰納といった探求方法は、論争的議論によっても完全に否定されることになる。それに対して、想起説は、これに対して「何であるか」というものをあらかじめ知っていたことが前提となり、それは感覚がきっかけとなり「何であるか」への探求方向が決定されるというのである。その「何であるか」という *lóyos* (定義) に、プラトンが措定したのが真実在であった。そして、事物の生成消滅の原因として真実在を考えたのは、自然学的説明が自分を満足させないからである。『パイドン』でも、自然学的説明は自分を混乱させるだけであり、もう二度とあのような説明の仕方をご免被るというソクラテスの発言がある。例えば、一が二になるのは、別の一が付加されたり、一が半分に分割されるからだとか、ある人は別の人より、背が頭一つ分だけ高い (大きい) という説明は、我々からすれば何もおかしいことはないはずである。しかし、ソクラテス (プラトン) は、この説明に満足できなかった。なぜなら、付加と分割というまったく反対の原因で二が生じてきたという点、頭一つ分だけ背が高い (大きい) というが、頭自体は体のなかでも小さな部分であるのに、その小さな部分が大きいことの原因になることは、ソ

クラテス（プラトン）にとっては明らかにおかしいのである。その説明の仕方は、「なぜ」という問いに答える真の原因ではなく、「それがなければ原因が原因ではありえない」もの、すなわち事物の外的作用を原因として挙げているだけだからである。そこでソクラテス（プラトン）がとった説明とは、もっとも確実であると現在考えている真実在（イデア）が原因となって事物をそうあるようにあらしめているというものであった。大きいものは、大の性質を、小さいものは小の性質を分有しているものであり、それぞれの性質は反対の性質を受け入れることなく、「退却するか滅びるか」（υπεξίέναι ἢ ἀπολείσθαι）のどちらかである。この原理を利用して、生の性質である魂は、反対性質の死をうけ入れることはないから不死であり、不死＝不滅ということが認められるが故に魂は不死であり不滅であることが証明されるのである。（この証明が、『パイドン』での最終証明である。）ソクラテス（プラトン）にとって、自然学的説明は、なぜ自分は、死刑が執行されようとしているのに牢屋から逃げずにここに留まることが最善と考えたのか、あるいは、世界がこうあるのが最善であることの、真の原因は何かという説明は与えてくれるものではなかった。そのために、アナクサゴラスに失望したのであり、混乱してしまったという言及をするに至った。そして、そういう事物を直接考察することは、日食研究者が、太陽を直視すると目を損なうという例えのように、自らの思惟を曇らせることにもなると考え、ロゴスの中に逃れて探究することにしたのである。まさに、付加、分割、小さいものが大きいことの原因といった説明の仕方は、それがたとえ反対の仕方であっても同じ結果をもたらしたり、また反対の性質を持つものが反対の性質の原因となるという、ソクラテス（プラトン）にとっては明らかに矛盾を含む説明であり、それに納得することは目を損ねた日食研究者のように、思惟を曇らされた人のすることだと考えたからである。だから、美しい事物が美しいのは、「美そのもの」によって、等しい事物が等しいのは、「等しさそのもの」によってという感直だが安全確実な原因を指定したのである。他方、普遍を過去に知覚された事物からの抽象化された概念として理解するとしたら、過去に知覚された事物にしか妥当しないことになり、これから未来において、例えばこれまで以上に美しいものに出会ったとき、どうしてそれがこれまで見たものより「より美しい」ということを知りえるのかという疑問が生じることになる¹²⁾。感覚的事物からの抽象、あるいは帰納された概念という説明では、どこかしら感覚物の持つ、虚ろいやすさ、あるいは不明瞭性を持つことを免れ得ない。さらに言えば、例えば、「等しさ」や「美」、「敬虔」といった概念

自体が等しいとか、美しいとか、敬虔であるとは誰も考えないであろうが、真実在は、それ自体で「等しい」し「敬虔」なのである¹³⁾。プラトンにとって「知る」ということが、理論あるいは、概念を把握することだけではなく、職人が身につけている技術知 (τέχνη) のように、実際に身につけて実践できることを意味していることを忘れてはならない¹⁴⁾。プラトンが探究していた、すべての事物に妥当し、そして諸々の事物をそうあらしめている究極的存在が、概念的存在ではないことは明らかである。いわば、絶対的な普遍存在とでも言うべき存在であり、そうなれば、真実在は、この感覚世界に存在するいかなるものでもないということになる。そして、そういう真実在は、感覚世界に存在しないのであるから、純然たる思惟の対象ということに必然的になる。このことは、『国家』でも、「生成するもの」(感覚物)は、思感 (δόξα) に、「実在」は知性 (理性的思惟、νόησις) に関わりとされている¹⁵⁾。そして、思惟は、魂が肉体を伴わない状態、それ自身であるときにもっとも見事に働くのである¹⁶⁾。そして、その知性によって把握されるのは、真実在についての λόγος (説明、あるいは、定義、本質)であり、それを『パイドン』では、恒常不変の真実在に魂が触れている状態=知恵 (φρόνησις) と言っているのである¹⁷⁾。想起の「真実在の知と感覚物の知は、別の知に属する」という条件¹⁸⁾からも、前者が後者に依存しないことが明らかであり、それは前者が先だって存在し、そのことが魂の先在を結論する要因にもなる。現在の我々がその λόγος を与えることができない状態にあることから、現在の我々が厳密な知識を忘却していると言うことは、けっして誤りとは言えないであろう。想起の論証は、真実在が存在するという確実と考えられている命題を前提としているので確実な論証とされている¹⁹⁾。しかし、それはあくまで前提であり、自らがもっとも確実だと思うロゴスでも、必要とあらば吟味の対象としなければならないのであり、あくまで前提という認識のもとに扱うべき²⁰⁾だが、プラトンにとって、これほど安全で確実な前提や議論はなかったと言えるであろう。

おわりに

以上のような、ソクラテス (プラトン) が真実在を措定するに至った経緯から、シミアスの反論が重大なものとならなかった理由が明らかにできるであろう。それは、ソクラテス (プラトン) にとっては、真実在こそ、全ての事物、世界を今あるようにしている原因として措定するに十分信用できるものである

ということ。それらが感覚物と同じでないこと。人間は生まれたその時から感覚を使うということ²¹⁾。これらのことから真実在の在り方に反するシミアスの反論は却下されるべきものであろう。ちなみに、ソクラテスの魂の不死論証に対して、シミアスが「魂＝調和（ハルモニア）説」を反論として提出した²²⁾後に、ソクラテスは、シミアスに想起説を認めるかどうかを問いただしている。シミアスは、想起説が、真実在という正しい根拠を基にしているから、自分は想起説を認めると言っている²³⁾。私がつどり着いたこの結論は、あまりに平凡であるかもしれないが、ソクラテス（プラトン）の考えからはそんなにかけ離れたものではないと信じる。そして今現在において、これが私の出すことができる最良の結論である。

注

- 1) テキストは、OCT 新版 (Duke et al.) と旧版 (Burnet) を併用したが、基本的に重大な差異はない。この論文で表記しているステパヌス全集ナンバーは、新版で採用されているものに従って明記した。
- 2) 72e1 から、想起の論証は始まるのであるが、この論証を要請したのがソクラテス自身でなく、対話相手の一人であるケベスだということを明記しておく。
- 3) 73d3-74a1.
- 4) 74a9-75c5.
- 5) 76c13-14.
- 6) Gallop, D., *PLATO PHAEDO*, p.134.
- 7) cf. Hackforth, R., *PLATO'S PHAEDO*, p.197.
- 8) 76b8-9
- 9) ὁ δ' ἐγκέφαλός ἐστιν ὁ τὰς αἰσθήσεις παρέχων τοῦ ἀκούειν καὶ ὄραν καὶ ὀσφραίνεσθαι, ἐκ τούτων δὲ γίγνεται μνήμη καὶ δόξα, ἐκ δὲ μνήμης καὶ δόξης λαβούσης τὸ ἡρεμεῖν, κατὰ ταῦτα γίνεσθαι ἐπιστήμην
「脳髄が聞くとか見るとか嗅ぐとかいう感覚を与え、これらもろもろの感覚から記憶と判断が生じ、記憶と判断が定着してから知識が生じる」
- 10) 藤沢 令夫, 『プラトン 『パイドロス』 注解』, p. 49.
- 11) Bostock, D., *PLATO'S PHAEDO*, pp.103-110.
- 12) 藤沢, p.48.
- 13) εἰ τί ἐστιν ἄλλο καλὸν πλὴν αὐτὸ τὸ καλόν, οὐδὲ δι' ἕν ἄλλο καλὸν εἶναι ἢ διότι

μετέχει εκείνου του καλοῦ (100c4-5)

「もし、「美」そのものを除いて、何かほかに美しいものがあれば、それは、かの美そのものを分け持つ（分有する）という理由のほかには何もない」という発言からこれらのことは窺える。

14) 『国家』332d2-3 では、正義を技術知 (τέχνη) として捉えているし、『ゴルギアス』460b にもこの考えは現われている。

15) 534a4-5.

16) 『パイドン』、65C5-9.

17) 79d6-7

18) 73c5

19) 92d6-e2.

20) 107b4-9.

21) 75b10-11

22) 85e3-d3

23) 91e2-92e4

参考文献

1. Gallop, D., *PLATO Phaedo*. Clarendon Press Oxford 1975, Reprinted 1998.
2. Hackforth, R., *PLATO'S PHAEDO, translated with an introduction and commentary*. Cambridge University Press 1955.
3. Rowe, C.J., *PLATO PHAEDO*. Cambridge University Press Paperback 1993, Reprinted 1998.
4. Bostock, D., *PLATO'S PHAEDO*. Clarendon Press Oxford 1986, Reprinted 1998.
5. Robinson, T.M., *PLATO'S Psychology*. Second Edition, University of Toronto Press 1995.
6. Ackrill, J.L., Anamnesis in the Phaedo: Remark on 73c-75c, from E.N.Lee, A.P. Mourelatos and R.M.Rorty (eds.), *Exegesis and argument*. 1973. (*Essay on Plato and Aristotle*, Clarendon Press Oxford, 1997.)
8. Burnet, J., *PLATONIS OPERA*, TOMVS IV. Oxford Classical Text, 1978.
9. Burnet, J., *PLATO, Phaedo Edited with introduction and note*, Clarendon Press Oxford 1911, Reprinted 1998.
10. Ross, W.D., *ARISTOTELIS ANALYTICA PRIOR ET POSTERIORA*, Oxford

Classical Text, 1964.

11. 藤澤 令夫、『プラトン「パイドロス」注解』 岩波書店 1984.
12. R.S.ブラック、内山 勝利訳 『プラトン入門』 岩波文庫 1996
13. 中川 純男、「アイデアと存在—『パイドン』の想起説」、古代哲学研究 Vol. XXXI, 1999.

原テキスト及び近代語訳

1. Duke, E.A., et al., *PLATONIS OPERA*, TOMVS I, Oxford Classical Text, 1995.
2. Burnet, J., *PLATONIS OPERA*, TOMVS I, Oxford Classical Text.
3. 藤澤 令夫 「パイドン」『プラトン』（田中 美知太郎編、所収）、世界古典文学全集 14、筑摩書房、1970 年.
4. 池田 美恵 「パイドーン」『ソークラテースの弁明 クリトーンパイドーン』（所収）、新潮文庫、1987 年